



＜ TBS ラジオ「人権 TODAY」の取材現場から 崎山 敏也 記者



Q1 東京周辺にはどれくらいのベトナム人がいるのですか？

2019年の時点で、東京都内には約3万7千人、周辺の神奈川県、埼玉県、千葉県も合わせると10万人以上が暮らしています。

日本語学校や専門学校が多い東京では留学生の姿をよく見かけます。周辺では農業や工業の技術を身につけるため働く技能実習生が大勢暮らしています。また、80年～90年代にベトナムから難民として逃れてきた人は定住促進センターがあった神奈川県や東京の西のほうに多く、今は日本国籍の人もあります。

Q2 どうして日本に来たのですか？

ベトナムは二つの国に分かれて、長い間戦争が続いたので、一つの国になったあと、負けた側の人たちが新しい政治のあり方に馴染めなかったり、迫害されたりして、海外に難民として逃れ、日本にも40年以上暮らす人がいます。一方、一つの国になったあと、経済は発展しましたが、人口も増え、貧富の差も生まれたので、生活の向上やチャンス求めて、この10年ほど、技能実習生や留学生が急にもものすごく増えているのです。



日本の人が一人ひとり違うように、ベトナムの人でもネパールの人でも一人ひとり違います。ベトナムでもネパールでも、あるいは他の国の人でも、自分の周りや学校にいたら、いろんな話をしてみませんか。

Q3 日本ではどんな暮らしをしていますか？

ベトナム人^{なんみん}難民の中には、日本語が十分できないまま暮^くらしてきて、親子で言葉が通じず、学校の大事なことが伝わらないことがあります。言葉が通じないと、病院に行ったり、高^{こう}齢^{れい}で介^{かい}護^ごを受ける時^{とき}も困^{こま}ります。一方、人口が減^へっている日本では、農家や工場^{ぎのうじっしゅうせい}で足りない人手^{おぎな}を技能実習生が補^{おぎな}い、コンビニや飲食店^{おぎな}でアルバイト^{りゅうがくせい}する留^{りゅうがくせい}学生^ふが増^ふえています。しかし、いま、新型コロナウイルスの影響^{けいざい}で、経済^{けいざい}が良くありません。真^まっ先^{さき}に辞^{やめ}めさせられ、どこかに相談^{さうだん}したくても、ベトナム語^{べトナムご}の相談^{さうだん}窓^{まど}口^{ぐち}が少^{すく}なかつたり、日本語では自^じ分^{ぶん}の状^{じょう}況^{きょう}を充^{じゅう}分^{ぶん}に説^{せつ}明^{めい}できず、困^{こま}っている人^{ひと}が大^{おお}勢^{ぜい}います。

Q4 日本で暮^くらして困^{こま}っていることはありますか？

人それぞれですが、高^{こう}齢^{れい}化^かしている難^{なん}民^{みん}は日本^{にっぽん}で老^{らう}後^ごを楽^{らく}しみたいでしょうし、子^こ供^{ども}や孫^{そん}の中^{なか}には、日本^{にっぽん}とベトナム、二^{ふた}つの文^{ぶん}化^かを身^みにつけてい^いるので、将^{しょう}来^{らい}国^{こく}際^{さい}的^{てき}に活^{かつ}躍^{やく}したいと考^{かんが}えている人^{ひと}も少^{すく}なくありませ^せん。一方、技^ぎ能^{のう}実^{じっ}習^{しゅう}生^{せい}や留^{りゅうがくせい}学^{がくせい}生^{せい}たちは、給^{きゅう}料^{りょう}を仕^し送^{そう}りして実^{じつ}家^かを助^{たす}け、身^みにつけた技^ぎ能^{のう}をベトナムに戻^{もど}って生^{せい}かしたい人^{ひと}もい^いれば、このま^ま、日^{にっ}本^{ぽん}で自^じ分^{ぶん}の能^{のう}力^{りき}を生^{せい}かして働^くき、暮^くらし続^{つづ}けたい人^{ひと}もい^いるので、皆^{みな}さんと将^{しょう}来^{らい}、同^{どう}じ職^{しょく}場^ばで働^くき、同^{どう}じ地^ち域^{いき}で暮^くらす人^{ひと}もい^いるでしょう。

Q5

どんな楽^{ゆめ}しみや夢^{ゆめ}を持^もって、暮^くらしていますか？

例^{れい}え^げば、留^{りゅうがくせい}学^{がくせい}生^{せい}が^が多^たい、東^{とう}京^{きょう}・高^{たか}田^だ馬^ば場^ばには、ベトナム風^{べトナムふう}のサ^さン^んド^うウ^いッ^ち「^{ばいん}ミ^ー」の店^{みせ}が次^{つぎ}々^{つぎ}とオ^おー^おプ^ぷン^んして^{して}い^います。また、私^{わたし}が^が取^{さい}材^{たい}した埼^{さい}玉^{たま}県^{けん}川^{かわ}口^{ぐち}市^しで開^あか^かれた^た旧^{きゅう}正^{しょう}月^{げつ}や秋^{あき}祭^{まつり}りには技^ぎ能^{のう}実^{じっ}習^{しゅう}生^{せい}や留^{りゅうがくせい}学^{がくせい}生^{せい}が大^{おお}勢^{ぜい}訪^{ほう}れ、ベトナム語^{べトナムご}で会^{かい}話^わし、ベトナム風^{べトナムふう}の食^{しょく}事^じや行^{ぎょう}事^じを楽^{らく}し^しんで^{んで}い^いました。日本^{にっぽん}で生^{せい}ま^まれ^れ育^{よく}つ^つたた^ため、ベトナムの文^{ぶん}化^かを全^{ぜん}く知^しら^らない難^{なん}民^{みん}の子^こ供^{ども}や孫^{そん}たちも来^きて^てい^いて、留^{りゅうがくせい}学^{がくせい}生^{せい}や技^ぎ能^{のう}実^{じっ}習^{しゅう}生^{せい}たちと時^じ代^{だい}や世^こ代^{だい}を^を超^こえて交^{こう}流^{りゅう}して^{して}い^いました。

※本原稿は、東京都人権プラザ企画展「写真で知る“世界のともだち”展（2020年7月27日～12月12日）の解説として執筆されたものです。本文中の統計データ等は執筆当時のものです。

執筆：崎山敏也／制作：東京都人権プラザ、2020年12月